

学校教育目標

「いのち」「感謝」「未来」を大切に生きようとする子どもの育成

「いのち」を大切に=自尊感情⇒（信頼される教職員集団になる）

ここで言う「いのち」とは生理的で身体的な意味合いと生活的で心理的な意味合いの双方を統合したものであり、その子にとっての「健やかな体」を中心に「豊かな心」「確かな学力」についても内包する。また、自分の「いのち」を大切にすることとは自尊感情を意味する。

「感謝」の思い=自他の尊重⇒（多様性を認める教職員集団になる）

自分にも周囲の人たちも各々の良さがある事を認め合い、自分ならではの経験があることを思って、よりよく生きようとすること。

「未来」に向かう=「願い」とキャリア開発⇒（主体性を育む教職員集団になる）

自己を理解し、周囲の人たちと共に願いを持ち、将来の夢に向けて挑戦し、自己実現を図る。

児童生徒が目指す姿 「しなやかに 成長する」

- 自分 : 「いのち」を大切にしよう（心身の健康／自尊感情）
- 自分と人 : 「ありがとう」と言える人・言われる人になろう（自他の尊重／多様性の理解／自己有用感）
- 自分と社会 : 「願い」を持ち、共にチャレンジする人になろう（自己理解／自己開発／自己実現）

学校経営目標

病院関係機関との関係性を生かし、入院児童生徒を適切に教育・支援し、小中高等学校への理解啓発を推進していく。

病院等関係機関との関係性を生かし

医療や福祉とのつながり、多方面にわたる学校とのやりとりによって得られた専門性やネットワークを生かし、社会に還元していく。

入院児童生徒を適切に教育・支援し

様々な病気や背景をもって入院してくる児童生徒のそれぞれの特性に対応した教育・支援を行う。

小中高等学校への理解啓発を推進していく

復学に向けた学習や支援（在籍校・前籍校と医療・福祉をつなぐコーディネートを含む）、復学後の支援、病弱教育に関する啓発等、全ての校種にわたる病弱教育における支援・センター的機能を果たす。

育成を目指す資質と教育方針

医療と連携した教育を推進する。指導・支援にあたっては、常に肯定的な態度で接し児童生徒の「心理的な安定」と「前向きな気持ち」を育むとともに、学ぶ意味や楽しさがわかる授業を通して、主体的・対話的に学ぶ力を高める。小集団指導の特性を生かして知識及び技能を習得するとともに、プレゼンテーションや議論を含む探究活動等を工夫して、習得した知識及び技能を生かす思考・判断・表現（コミュニケーション）の力を高める。ICT機器等を活用し、全ての学習活動において、主体的・対話的で深い学びを推進する。指導・支援を行うにあたっては、定期的にケース会議を持ち、入院してくる児童生徒のそれぞれの特性に対応した教育・支援を行う。

自ら学ぶ力を高めるために

- 一人一人の学習状況とその背景・特性を踏まえた学習の定着
- 「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」「考える大切さ」が実感できる授業の展開
- 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実
- 多様な形態での主体的・対話的で深い学びの実践。ICT等の活用

自ら律する力を高めるために

- 自己有用感や自己肯定感などの高揚を図る取組
- 目的意識を共有し、互いに認め励まし合う、共感的な人間関係に基づく集団づくりの実践
- いじめをはじめあらゆる人権侵害を許さず、人間の尊厳の大切さを実感できる指導の徹底

桃陽総合支援学校の重点

願いを持ち自分らしく生きる子どもの姿を実現するために（復学に向けたステップ）

- | | |
|--------------------------|------------------|
| ① どうありたいのかという思いを持つて | 見通しの確保、学びの再構築 |
| ② どうありたいのかという思いが行動に反映される | 積極性と自律、学ぶ意欲の向上 |
| ③ どうありたいのかという思いが結果に反映される | よりよい生活・学びスタイルの確立 |

願いを持ち自分らしく生きる子どもの姿を実現するために何をどのようにするのか

＜カリキュラムマネジメントの視点から＞

- 児童生徒自身によるキャリアプランの構築（キャリアパスポート等の活用）
- 思考力・判断力・表現力を豊かにする言語活動の実施（作文やスピーチ、議論、プレゼン等）
- ICT機器等の有効活用による「授業改善」「小集団を構成した教科指導」の推進
- 前籍校との交流学習の推進（行事参加型、ネット通信交流型、移行型）
- 個別の包括支援プランをより一層充実させる（教育・医療・福祉・家庭の連携、ケース会議の充実）
- 学びに向かう気持ちを高める行事や発表のあり方を工夫するとともに、各教科と関連付ける

令和5年度の重点的な取組

- (1) 児童生徒が安心して学校生活を送ることができる環境作りを、全教職員で行う
- (2) 「個別の包括支援プラン」に基づき、自立活動の目標を取り入れた教科学習を実践する
- (3) 定期テスト等に偏ることなく、教育活動全体を通し、各教科の特性を生かした新しい学力観（3観点）に沿った評価を行っていく
- (4) 児童生徒の興味・関心を生かした主体的・対話的で深い学びを実現した授業を推進する
- (5) 医療機関や前籍校と連携して心身症や精神疾患のある児童生徒の指導・支援を充実させる
- (6) 「個別のアセスメントを生かした指導支援」と「発達障害に関する指導支援」を充実させる
- (7) 特に分教室・訪問教育においては、ICTを活用した集団での学習活動を推進する
- (8) 京都市内各校種への入院児童生徒への支援やコーディネートについての発信・啓発を充実させる
- (9) 小中学校の支部や、小中高の校内研修等で病弱教育の理解を進める研修を行う
- (7) 前籍校への復学を前提とする個別の教育支援計画を重視した「個別の包括支援プラン」を作成
- (8) 退学時に、合理的配慮等の丁寧な引継（必要に応じた復学先への支援を含む）
- (9) ICT機器等を活用しながら、主体的・対話的で深い学びを重視した授業づくり・授業改善を推進する

- (10) キャリア教育の視点に基づく、教育活動の指導・支援の見直し
- (11) 桃陽ならではの道徳科や小学校英語、プログラミング教育の創造。
- (12) 働き方改革の推進（行事の精選、これまでのリソースの活用と改善）
- (13) ICTを活用した合理的配慮のあり方の、より一層の充実
- (14) ピアカウンセリングを念頭においた児童生徒の心理的ケアの推進
- (15) 文部科学省「ICT を活用した障害のある児童生徒等に対する指導の充実事業」の受託と継続性を考慮した高校生支援の継続

令和5年度学校運営方針

- (1) 相手の立場に立つ
 - ・ 対保護者、対前籍校等においては、ものごとの原理・原則を基本としておさえつつ、相手の置かれた立場や考え方方に寄り添いながら、相手の理解を促すよう誠意をもって対応する
 - ・ 医師及び病棟看護師はじめ、関係者の視線や考え方を常に意識し、よりよい協力関係を築けるように、言動や行動に注意し信頼関係を醸成する
- (2) 小学部・中学部、本校・分教室の枠組みを超えた連携・協力体制
 - ・ 必要に応じて、小学部・中学部、本校・分教室の枠組みを超えた全校指導支援体制で臨む
 - ・ 児童生徒数の変動等に応じて、年度途中であっても分教室間、本校↔分教室↔支援部間の異動を行う
 - ・ 訪問教育・教育相談については、窓口担当は支援部に置くが、指導支援については指導部全体で行う
- (3) 分教室での指導の基本的な考え方
 - ・ 治療の状況から通常と同様の履修を求めていくことは身体的・心理的負担となることを踏まえる
 - ・ 心理的適応をはじめ自立活動の内容をふまえた指導・支援を行う。また、「入院している時だからこそ」感じられる仲間との励まし合い等、「学びに向かう力・人間性」や、「思考・判断・表現」といった側面に重点を置く。そのため、前年度までの実績を活かし、ICTを活用した授業をより日常的に推進していく
 - ・ 分教室の実態に応じた、適切な「個別の包括支援プラン」のさらなる改訂をしていく
 - ・ 特に分教室においては在籍状況が頻繁に変わるため、小学部教員と中学部教員は相互に連携し、必要に応じて他学部の指導を行う
- (4) 分教室学籍と指導・支援
 - ・ 分教室での指導は籍の異動を基本とする。ただし、高校等受験の場合、依頼があれば出願時をもって前籍校に戻す。基本的に、籍異動のない指導・支援は行わない
- (5) 分教室の授業改革
 - ・ 分教室において教科の指導は京都市スタンダードを参考に基本的には集団（単式・複式）で行う
 - ・ 分教室中学部においては当該学年集団を本校や他の分教室とつないで作り、学習集団とする。配信する全体指導者の他に、必要に応じて受信側にT2が入るようにする
 - ・ 進度や教科書の違いによる個別学習は自習を基本とする。
 - ・ BSにおいてはタブレット端末で常時通信接続が可能な状態にして、分教室や本校からの授業配信を受

けられるようにする

- ・ ICT活用を通したカリキュラムマネジメントや主体的・対話的で深い学びについて研究を深める

(6) 医療や前籍校との連携をより確かにするために医教連携コーディネータを位置づける

- ・ 各医療機関や前籍校（高校生支援の場合は在籍高校）との教育の窓口となるとともに、ケース会議等の様々な調整を行う。（本校、京大・府立分教室に配置）

(7) 児童生徒指導に関する教員間の共通理解を図る

- ・ 児童生徒にとってよりよい指導支援を行うために、軸となる指導の一貫性と児童生徒個々の違いに基づく指導の多様性の両面について機能するようにする
- ・ 互いの指導について異論があれば、話し合い等を行い必ず調整する

(8) 学外教育活動支援は部の枠を超えて行う

- ・ 小中学校に対するICT接続支援、その他、研修の講師依頼等については、地域支援コーディネータが窓口となり調整するが、実際の動きについては部の枠を超えて取り組む
- ・ 高校生支援の中心は、各病院での高校生学習会と医教連携コーディネータによる病院と高校のコーディネートである。なお、高校の遠隔教育に協力し、T2として教育に携わる場合がある

(9) テレビ会議等のオンラインシステムを使った授業や会議等の推進

- ・ 勤務地が分散するため、従来から打ち合わせには活用しているが、移動負担の軽減等に鑑み、オンラインシステムの適用をより日常化させる

(10) 働き方改革にともなう勤務時間の縮減

- ・ 7：50留守電解除、19：00電話対応終了、19：00完全退勤の徹底。時間厳守。法令遵守。（金曜日はエコオフィスデーとして、18：00電話対応終了、その後速やかに完全退勤）
- ・ 「・・・させてあげたい」は本当に児童生徒のためになるのか俯瞰的な視点でとらえる
- ・ 行事を精選・再構築する。教材等についてはこれまでの蓄積を有効利用すること
- ・ 企画・立案することと、それに基づいて資料等を作成することを可能な限り分離し、校務支援員の業務として依頼する等工夫する

(11) 病院と学校の関係

- ・ 従前どおり、入院＝入学、退院＝退学 であり、結果的に入退学は病院（主治医）の入退院の判断をもって決まる。学校は求められれば入退院の決定に資する情報提供は行うが、あくまでも決定は医療がすべきこと
- ・ 学籍の異動日については、入退院の状況を踏まえて、桃陽と当該校の校長間で決定し、両校の担当者間で手続きを行う
- ・ 病院とは常時連携し、信頼関係の醸成に努める

学校教育目標

「いのち」「感謝」「未来」を大切に生きようとする子どもの育成

児童生徒の目指す姿 「しなやかに 成長する」

自分と社会

「願い」を持ち、共に「チャレンジ」する人になろう
自己開発／自己実現

自分と他者

「ありがとう」と言える人言われる人になろう
自他の尊重／多様性の理解/自己有用感

自分

「いのち」を大切にしよう
心身の健康／自尊感情

信頼される教職員集団（一番の環境は教職員である）

*自ら律する力

☆自己有用感や自己肯定感などの高揚を図る

*自ら学ぶ力

☆一人一人の学習状況とその背景・特性をふまえた学習の定着を図る

子どもが目指す姿を実現していくステップ

★どうありたいのか★

- ① 思いを持つ
- ② 行動に移す
- ③ 振り返る

カリキュラムマネジメントの視点から

- 「個別の包括支援プラン」の確実な立案・改訂
- 言語活動充実
- 教科等におけるICT機器等の活用教育の推進
- 前籍校との交流学習の推進
- 個別や少人数での学びの利点を生かした教育・支援の推進
- 各教科との関連付けを図る

育成を目指す資質と教育方針

- 1 学びへの力を高める：前向きな気持ち、学ぶ意味や楽しさ
- 2 知識・理解・技能の習得：少人数学習、ICT活用
- 3 思考・判断・表現の力の育成：探求活動の工夫、多様な表現

学校経営目標

病院関係機関との関係性を生かし、入院児童生徒を適切に教育・支援し、小中高等学校への理解啓発を推進していく。